

ミクロ経済の生産関数の話。これが積み上がっていくと市場経済ができて、市場メカニズムが形成される。つまり競争がなぜ望ましいかという話に繋がってゆく。前回話したのは、限界生産力という概念について。非常に重要な考え方。

先週例を出したような感じで理解してほしい。

10エーカーの土地で労働者を増やしていったときに、総算出がどう変化するかというと、1 : 10、2 : 24、3 : 39という感じになっていた。労働の限界生産力というのは、労働を追加的に一単位追加したときに、どのくらい生産量が上昇するのかという話なので、それぞれにおいては24 - 10、39 - 24という感じになる。

そして平均生産力というのは、総算出を労働者の数で割った物である。なので、それぞれ、1分の10、2分の24、3分の39という感じになる。

これらをグラフに表すとどうなるだろうか？

人	平均	限界
1	10	
2	12	14
3	13	15
4	13	13
5	12.2	9
6	11	5
7	9.4	0
8	8	-2

これをグラフに書く。すると・・・

平均は3・4をピークに山形のグラフを形成している。限界はというと、3を頂点に山形になり、マイナスにまで及んでいる。この形が非常に重要。というのは、通常の生産関数というのは、S字曲線で前半は傾き（接線の）が急になり、そして徐々に傾きが減っていき、やがてマイナスになるという構造になっている。前回も話したように、1単位追加したときの変化量が限界生産力ということなので、突き詰めて考えてゆくと、接線の傾き = 限界生産力ということになる。そして、0から見た傾きが一番大きいところが、平均も一番高い値になっているはずである。

限界生産力逓減の法則というのは前回も話したので割愛。

限界生産力0になるところはどこかというところ、つまり、接線が $Y = a$ という感じになるところである。つまり追加的に一単位労働力を追加しても、生産力の増加は見込まれないということである。そしてそれ以降は限界生産力がマイナスになることから、それ以上労働力を追加しても、効率が悪くなる一方であるということを表している。

新しい製品が生まれると、そういうものにはプロダクトサイクルというものがある。始めは売れ始めるが、徐々に売り上げが下がってくるというもの。生産関数を同じような更正になっている。大切なのは限界生産力が逡減するという話。そして平均生産物と限界生産物との関係。

これが援助の話とどう関係するのか？

ミクロの行動が分からないと援助の話もできないので。

159 ㉔の、じっさい、限界生産力がマイナスに転じていても、土地を広くすれば、もしかするとプラスに転じるかもしれない。土地が1エーカーの場合、1 : 3、2 : 6、3 : 8  
2エーカーの場合、1 : 6、2 : 12、3 : 17。3エーカーの場合、1 : 10、2 : 24、3 : 39という風になる。これをグラフに書くとどうなるだろうか。

どうしてこんなことやるのかというところ、生産者・企業が合理的に行動したときに、どうやって生産高が決まるのか、ということの説明したいのである。企業が合理的に動くというのは、利潤が最大になるように行動するということである。

では最近環境や地域の発展など、そういうことを企業が考えているときに、利潤とはどのような関係にあるのかというところ、それがよくわからない。他の先生の授業を聞いてほしい。

とりあえず板書

1 世界銀行

2 I M F

3 アジア開発銀行

J I C A

10/1 J B I C

ODA 開発援助

思想がない

